東北大学新聞　平成24年（2012年）5月22日（火曜日）

災害科学国際研究所を設置

震災復興に向けた取組み

今年4月、本学は災害科学国際研究所を設置した。昨年発生した東日本大震災から立ち上げたプロジェクトとの一つで、災害科学に関する研究者を集め社会に実装できる学問の創成を進める。

今年4月、本学に災害科学国際研究所が設置された。昨年3月に発生した東日本大震災を踏まえて、大規模自然災害に対応する学際的研究組織を目指す。

本学では昨年3月に発生した東日本大震災を受け、復興に向けた七大プロジェクトと復興アクション100+を公表して、復興への貢献を目指している。この七大プロジェクトの一つ、災害科学国際研究推進プロジェクトとして災害科学国際研究所を設置した。

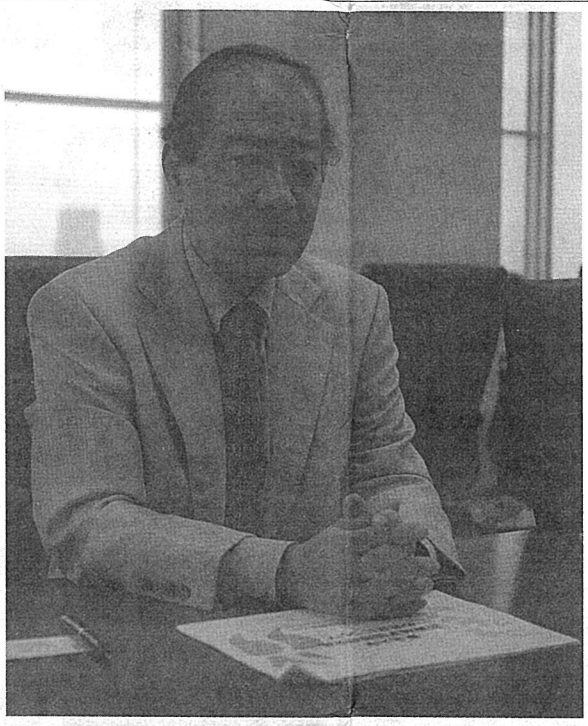
本学では2007年に災害科学を研究する研究者の学内横断組織として「東北大学防災科学研究拠点」がおかれていた。これは「学際融合」を掲げて、本学の防災にかかわる研究者が8部局から集まった組織。災害科学国際研究所は、この組織を発展的に解消して設置された。初代の研究所長は平川新教授が務める。

災害科学国際研究所は、これまでの災害科学研究の弱点と限界が、東日本大震災での被害の拡大につながったととらえている。そこで『実践的防災学』の創生」をミッションとした。大学で研究された科学を社会に実装する学問とし、防災・減災・復興への先導的役割を担う。単に防災技術、減災技術の開発にとどまらず、地震・津波警報を受け取る人間の反応や文化財の防災対策、被災地支援の方法など、幅広く人間・社会を研究対象とする。

3月11日に開いた災害科学の国際研究協力共同宣言フォーラムで本学は、国内外の多くの大学と災害科学分野について研究協力を進めることを明らかにしている。

研究は大きく災害リスク研究部門、人間・社会対応研究部門、地域・都市再生研究部門、災害理学研究部門、災害医学研究部門、情報管理・社会連携部門・寄附研究部門に分かれ全36分野での研究がなされる。

5月23日には災害科学国際研究所開所記念国際シンポジウムも開催されることになっている。



▲所長の平川教授

研究所が入る建物も新たに青葉山キャンパスに建設する。平成26年度当初から利用を始める予定。建物が完成するまで同研究所の研究者は元の所属部局で研究を進めるほか、月に2回の研究所会議、部門別、分野別の会議を開きながら連携できる体制を作る。

災害科学国際研究所の看板は、建物が完成するまで本学青葉山キャンパス工学部中央管理棟に掲げられている。

英文名称はInternational Research Institute of Disaster Science。略称はIRDeS（イリディス）。英名の略であると共にロゴマークのキーカラーであるアヤメの英名にも合わせている。

▶災害科学国際研究所の看板

ロゴマークは「災」を反転させたものをデザイン化した。災いを転じて災害に賢く対応できる社会を作っていく決意を表す。キーカラーはアヤメ色で東北大学のロゴマークに由来している。

平川所長は、「各研究者が専門研究を深めるとともに、多くの共同研究を通じて社会が求める災害研究の間口を広げていきたい。多様な研究成果を発信することが、今後発生することが予測されている首都直下地震、東海地震などへの対策にもつながる」と語ってくれた。

研究計画は今後10年までのものが作られている。長期にわたる東日本大震災からの復興や、遠くない時期の発生が予測されている日本や海外での巨大地震・津波への対策強化が、災害科学国際研究所の大きな研究課題である。